

第33回から、この『…塾』を読んでくださっているお二人の方からのご要望にお応えした内容をつづけてきました。今回はその最後の項目になります。

「聖母マリアについて教えてほしい」—。マリアについて書かれた本は、数え切れないほどあります。その生涯をご紹介するためには、短くても5~6回、いやそれ以上の連載が必要です。そこでこの稿は、「受胎告知」、「処女懐胎」という奇跡的な出来事と、カトリック信者にとってのマリア … 等について、お話ししようと思います。

✦ 聖母マリアについて (1)

「マリア」という名を聞けば、キリスト教に詳しくない方でも「ああ、イエス・キリストのお母さんだ」ということはご存知でしょう。イエスをお産みになった女性です。〈イエス〉という名は、当時のユダヤ社会では多くの男子につけられた名前であったようです。ユダヤの人たちの日常語であるヘブライ語の発音では、「イエホシュアー / イエシュア」というそうです。山浦玄嗣^{はるつぐ}先生の『ガリラヤのイエシュア』の「イエシュア」は、「イエホシュア-」のガリラヤ訛^{なま}りを採用したものです。

マリアという名もたくさんの女性が名乗っていました。ちょっと前の日本でいえば、「はなこさん」「けいこさん」「ようこさん」などにあたるでしょうか。最近のご両親が凝った名前をつけるので、〇〇子さんはあまり見かけなくなりました。男の子も同様ですから、保育園・幼稚園、学校の先生方はたいへんです。入学式や卒業式では「ふりがな」をつけた名簿を用意しないといけませんでしょう。

カトリック教会の聖堂内部はもちろんのこと、カトリック系の学校や病院などの中庭などには必ずと言っていいほど、「聖母像」(あるいは「聖母子像(イエスを抱いたマリア像)»)が置かれているのをご存知の方も多と思います。それほどカトリックの信者にとって〈聖母マリア〉は大切なお方です。

「天使」による「受胎告知」

聖母マリアの受胎について記述がみられるのは、四福音書の中では『マタイ』と『ルカ』だけで、『マルコ』と『ヨハネ』はまったく触れていません。

では、『ルカ』1章にあるみなさんも聞いたことがあるはずのお話から読んでいきましょう。神さまは天使ガブリエル(「神は力ある姿を現す」の意)を、ガリラヤにあるナザレという町に住むヨセフという人の「いいなずけ」であるマリアに遣わしました。

.....

28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」
29 マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。 30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。 31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。 32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。」(中略) 35 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」 35 天使は答えた。「聖霊があなたに降り、いと

高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれる。 36 あなたの親類のエリサベトも、年をとっていたのに、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。 37 神にできないことは何一つない。」

38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」そこで、天使は去って行った。

「天使」とは、ユダヤ・キリスト教においては肉体を持たない霊的存在の被造物で、神さまのお側に仕えながら、神さまと人間を仲介するといわれます。みなさんには幼いころから翼をつけたかわいらしい天使、あの森永製菓のマークでおなじみだと思います。「ミルクキャラメル」— なつかしいですね！ 聖書に固有名で登場する天使では、このガブリエルをはじめ、ミカエル、ラファエルなどがよく知られています。

マリアのもとに神さまが遣わしたのは、その中の一人であるガブリエルでした。天使はマリアに「よろこびなさい、あなたは恵まれた方です。神さまはいつもあなたのそばにおいでです」と伝えました。急にこんなことを言われたら、誰でも驚きますよね。天使が現れただけでもビックリするのに、自分が「恵まれた者」で「神さまがいつも一緒ですよ」と言われたのですから。ナザレという田舎町の平凡な娘だったマリアは、「どうして私が恵まれた者なのかしら?!」と思ったにちがいません。

天使はさらに言葉をつづけました。「あなたは身ごもって、男の赤ちゃんを産む。イエスという名前にしなさい。その子は成長して神さまの子と言われるようになる」。ヨセフとは結婚の約束をしているだけで、一緒に住んでいるわけではありません。「えっ、なんですって！ わたしが男の赤ちゃんを産むですって!!」、「名前まで決めちゃって!」、「その子が神さまの子ですって!?!」…。マリアの驚きと当惑は、どれほどのものだったでしょう。

マリアは「どうしてそんなことがありえましょう。わたしは男の人を知らないのに …」と天使に答えます。ヨセフと婚約はしていたものの、まだ枕を共にしたことはないのに、そんなことはありえない — と。この時代のユダヤ教では、婚約している女性が相手の男性以外と性的な関係をもった場合、「姦通罪」を犯したとして「石打ちの刑」(罪を犯した者を取り囲み、数人あるいは十数人が決して小さくはない石を絶命するまで投げつけるといって、考えただけでも恐ろしい刑)に処されることになっていました。マリアは、身に覚えのない罪を着せられてしまうという恐れを抱いたわけです。また、身ごもった子が神さまの子であろうがなかろうが、ヨセフが自分をどう思うか心配になったはずです。

しかしそのあと、それまで誰も耳にしたことのない言葉を聞きました。

『35 神さまの尊き御息(聖霊)がそなたにかかる。神さまのお力がそなたに包みかぶさる。』(『ガリラヤのイエシュ』)。

天使は「聖霊があなたに降って身ごもる」のだと告げ、マリアの恐れと心配を消し去ります。「聖霊」— 「神さまの熱い思いを運ぶ息吹」すなわち、神さまからの「働きかけ」(前回参照)です。天使ガブリエルは、神さまの「思い」をマリアに告げたのです。

マリアは恐れながらも『38 わたくしめは我らが御あるじなる神さまの召し使い女でござりまする。仰せのごとくいかようにもこの身をおつかいくださりませ!』(『ガリラヤのイエシュ』)と天使の言葉を受け入れ、神の子を身ごもることを承諾しました。このマリアの決断から、彼女の新しい生き方が始まります。

困惑するヨセフ

一方、許嫁であるヨセフはこの事実をどう受けとったのかをみていきましょう。

18 (イエスの) 母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、彼女は聖霊によって身重になっていることがわかった。 19 彼女の夫ヨセフは義しい人で、また彼女を晒し者にしたくなかったので、彼女とひそかに離縁しようと思った。 20 彼がこれらのことを「悶々として」思いめぐらしていると、主の御使いが夢で彼に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、お前の妻マリアを受け入れることを恐れるな。なぜなら、彼女が孕んでいるのは、聖霊によるものだからである。 21 彼女は男の子を産むであろう。お前はその子をイエスと名づけるであろう。なぜなら、彼こそが、彼の民をその「もろもろの」罪から救うからである」。 22 このことすべてが生じたのは、預言者を通して主によって言われたことが満たされるためである、すなわち、 23 「見よ、乙女が身重になって男の子を産むであろう、そして「人々は」その名を『インマヌエル』と呼ぶであろう」。この名は訳すれば、「神、我らと共に」という意味である。 24 そこでヨセフは眠りから起きて、主の御使いが彼に言い渡したようにし、その妻を受け入れた。 25 そして彼女が男の子を産むまでは、彼女を知ることはなかった。そしてその子を「イエス」と名づけた。』
……………『マタイ』1章 (佐藤 研・訳)……………

「マリアが身ごもった!? そんなはず、ないよ!!」。ヨセフはビックリ仰天したことでしょう。身に覚えがないのに、婚約相手が妊娠したというのですから。もしそれが事実なら不義密通で、マリアは姦通罪に問われ「石打ちの刑」です。

ヨセフが取りうる選択肢は二つ。一つは、マリアのおなかの子は自分の子だと認めること。しかしそれは、まじめなユダヤ教徒の彼にとって『汝、偽証することなかれ』という〈モーセの十戒〉を破ることになりますから、できるはずはありません。

もう一つは逆に、認知しないこと。しかしこれでは、マリアは石打ちの刑です。彼女を愛する『義しい』(山浦氏は「やさしい」と訳します!) 彼にはそんなむごい事はできません。そこで『彼女を晒し者にしたくなかったので、彼女とひそかに離縁しようと思った』とあります。ところがユダヤの法では、婚約者はすでに法的には正式の妻で、離縁するには二人の証人を伴って裁判所に出頭し、手続きをしなければなりません。ひそかに婚約を解消することはできません。

ヨセフが悩みの中にいたとき、彼の夢に「主の天使」が現れました。この個所では、その天使の名は書かれていません。天使は、「マリアのおなかの子は聖霊によって宿ったのだから安心して妻として迎えなさい」と告げます。

「見よ、乙女が身重になって男の子を産むであろう、そして「人々は」その名を『インマヌエル』と呼ぶであろう」というのは『イザヤ書』7章14節からの引用です。25節にヨセフが『「イエス」と名づけた』とあります。「イエス」とは「ヤーウェは救い」という意味であり、「ヤーウェ」とは「いつも私たちと共におられるお方」ということですから、のちに人々から「インマヌエル(=神、我らと共に)」と呼ばれる — という天使の預言に従ったわけです。

「乙女」と訳されている語は、原語のヘブライ語では単に「若い女(娘)」という意味です。『七十人訳聖書』(初期キリスト教徒に読まれたギリシャ語訳旧約聖書)が、『イザヤ書』7章14節のメシアを生む「若い女・almāh」というヘブライ語を、ギリシャ語の「乙女・処女」にあたる Parthenos と訳しました。それがマリアの〈処女懐胎〉の教義に結びつきます(これについては次回に書きます)。

「神秘」を受け入れたマリア

マリアは『わたくしめは我らが御あるじなる神さまの召し使い女でござりまする。仰せのごとくいかようにもこの身をおつかいくださりませ！』と天使の言葉を信じ、すべてを委ねました。

.....
46 わたしの魂は主をあがめ、47 わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。48 身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人もわたしを幸いな者と言うでしょう。49 力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。

.....
これは『ルカ』1章にある「マリアの賛歌」という箇所です。自分が神によって生かされていることを信じていたマリアは、この突然の出来事は自分に対する「神の恵み」によるものであることを悟りました。自分のことを『主のはしため(端女、召し使いの女性、女中)』と言っていることでもわかるように、マリアは自分を「取るに足りない一人の人間」であると自覚する謙虚さと、神のことばに対する従順さ、そして絶対的な信頼をもった一人の女性でした。

キリスト者の生きる「模範」としてのマリアの生き方

中川博通神父(カルメル修道会司祭)は、『心とからだ』でイエスというみことばを受けとめ、キリストとの完全な一致を生きたマリア』に『キリストを信じ、愛し、キリストと一致して生きていく教会の典型的な姿がある』とします。すなわち、マリアの生き方の中に、『キリストを生きていくキリスト信者の典型、生きる模範としての姿がある』(『教会憲章』63)というのが、カトリック教会の考え方です。

それではマリアのどのような生き方がキリスト信者の「典型」であり、私たちの生きる「模範」だったのでしょう。マリアの生涯は、イエスや弟子たちとの関わりを抜きには語れません。そのことについては、イエスの生涯を辿る際にくわしく書きたいと考えています。

- 【引用・参考にした書籍】
- ・山我哲雄 『キリスト教入門』
 - ・『角川 必携 国語辞典』
 - ・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で (上・下巻)』、『ガリラヤのイエシュー』
 - ・佐藤 研 訳『マタイによる福音書』[新約聖書翻訳委員会 訳 『新約聖書』より](岩波書店)
 - ・中川博通 『存在の根を探して イエスとともに』(オリエンズ宗教研究所、2015)
 - ・オリエンズ宗教研究所 編『キリスト教入門 生きていくために』(オリエンズ宗教研究所、2014)
 - ・古川順弘 『物語と挿絵で楽しむ 聖書』(ナツメ社、2016)
 - ・百瀬文晃 『キリスト教の 本質と展開 キリスト教概説[Ⅱ]』
 - ・フランシスコ会聖書研究所 訳注『聖書 原文校訂による口語訳』
 - ・稲垣良典 『カトリック入門 日本文化からのアプローチ』(ちくま新書、2016)
 - ・ホセ・ヨンパルト 『カトリックとプロテスタント どのように違うか』(サンパウロ、1999)